医療ルネサンス No.5784

股関節脱臼

5/5

高齢でも手術で改善

「あと何年生きられるかわからないけど、たとえわずかでも普通の女性として生きてみたかった。それが実現してうれしい」

昨年12月、右の股関節脱臼を手術で治した東京都八王子市の吉井たまえさん(78)は喜びを語る。

日本では1970年ごろまで、先天性股関節脱臼が多発していた。その後、健診の充実や予防啓発の普及で患者は激減したが、適切な治療を受けないまま、加齢とともに痛みなどの不調を訴えるシニア世代もいる。吉井さんもその一人だ。

小さい時から、右脚が少し下がるような歩き方を気にしていた吉井さん。「私はどうしてこうなの?」。母に尋ねても、「生まれつきだから」と言われるだけ。20歳の時、初めて整形外科医の診察を受け、先天性股関節脱臼だと知った。「今から治すのは難しい」と告げられ治療はあきらめたが、病名がわかって気持ちの整理がついた。

脚は少し不自由だったが、間もなく結婚して2人の息子に恵まれた。右脚が左より3センチほど短いので、パンツの丈を詰めたり、靴のヒールを継ぎ足したりする不便さはあっても、平穏に暮らしてきた。

2、3年前から痛みを感じるようになり、知人の紹介で慈恵医大第三病院(同狛江市)整形外科を訪ねた。診察した大谷卓也さんは、人工股関節を付ける手術を提案した。

吉井さんが受けた手術は、右大腿骨(だいたいこつ)の上端(骨頭)に人工骨頭を取り付け、上にずれていた骨を戻し、骨盤のくぼみ(臼蓋(きゅうがい))の位置に取り付けた人工臼蓋にはめ込む。これにより右脚は約2・5センチ伸びた。手術で脚を伸ばし過ぎると筋肉や神経がつっぱり、まれに神経まひの合併症を起こすことがある。このため、伸ばす長さは3、4センチが限度といわれ、慎重に調整する必要がある。

退院の日、病院を出た吉井さんは、まっすぐ衣料品店へ。新しいパンツを身に着けて店を出ると、喜びがこみ上げてきた。「裾を切らずに既製服が着られる。涙が出るほどうれしかったのを忘れません」

吉井さんは手術後、股関節の痛みも消え、現在は筋力をつけるためのリハビリに励んでいる。1年ほどすれば、問題なく歩けるようになる見込みだ。

大谷さんは「子どもの時に十分な治療ができず年を重ねても、治療技術が進歩した今、よくなる方法はあるので、あきらめないでほしい」と話している。

(高梨ゆき子)

(次は「被災者を支える」)

リハビリも兼ねて散歩する吉井さん。自宅でも毎日、片足立ちなどのリハビリを欠かさない

ご意見・情報を 〒100-8055 読売新聞東京本社医療部 FAX03(3217)1960 iryou@yomiuri.comへ

村上祥子の夕食クリップ

● アサリとヒジキの白あえ

(95kcal・塩分0.4g/1人)

【材料2人分】木綿豆腐100g/アサリ(殻付き)100g/芽ヒジキ(乾燥)3g/フキノトウ2個/練りゴマ(白)小さじ1杯

【作り方】❶豆腐はペーパータオルに包み、ざるにのせる。1kg程度の重し(水1lを入れたボウルなど)をそっとのせて30分おき、水切りする❷鍋にアサリを入れ、酒大さじ1杯を加えて火にかける。貝の口が開いたら火を止め、粗熱を取ってから身を取り出す。鍋の汁はこし、身はその汁に浸しておく❸ヒジキはゆでて戻し、ざるへ上げる❹フキノトウはさっとゆでて水に取り、固く絞ってみじん切りにする。ヒジキとともに②の汁に加え、10分おく❺すり鉢に豆腐を入れて滑らかになるまでする。練りゴマ、砂糖小さじ1杯、薄口しょうゆ、ゴマ油各同½杯、塩少々を加えてすり混ぜる。滑らかになったら、④の汁気を切って加えあえる。